

何も持たない者は…… (新しき世界へ 1969年5月号)

“インヤン”誌 1968年11月号

G.オーサワ 著

後藤光男 訳

何も持たない者は何のものにも依存しない。それは財産も、知識も、地位も、名声も権力も、召使いも、奴隷も持たない人である。それらのものは雲や霧や霜や露のように果敢なく消え去ってしまう。それらは丁度水に浮ぶ腐った板切れのようなもので、それにすがりつく者は期待を裏切られ、破滅し、死に追いやられる。そこから遠去かり、健康と美を身につけることは決してやさしいことではない。体力や権力や名誉等すべては一日で急に煙のように消え失せてしまうであろう。それらは遅かれ早かれ、例外なく必ず消え失せる。かようなものに頼ることは至る所にひびの入っている大宮殿に住むようなものである。それこそは幻の城である!

我々は何ものをも所有しない人間とならねばならない。何年もの長い間、全力を尽してこれらすべての幻の財産を求めることは歎かわしいことである。その老年において或はその若年に於いてさえも、すべてを失う人は幸福である。人はすべてこれらのものを失った時に、はじめてそれが全くの幻影にすぎなかったことに気が付く。その時、真なるもの、永遠絶対なるもの、無限にして正義なるものを求めはじめる。人はそれまで本心を蔽っていた。この時はじめて、決して消失しないもの、無限の自由というもの、絶対の正義というものは、生命、精神、判断力、記憶力、自由、光と闇と地、星々と空間、草木、山川、寒暑、炭素と酸素、空気と水…のように常々から与えられていたのだということを理解する。無限の空間、宇宙は永遠の過去から、はじめなきはじめから存在する。それらは又最後まで、つまり永遠に存在するであろう。誰もそれらを所有したものはなかった。誰もその所有者ではない。しかもそれらは存在するすべての人がそれによって作られている。宇宙と人間とは創造者とその作品との間の関係にある。しかし人間は間違えてそれを逆に解釈している、彼らは人間が作品であることは知っているが、その創造者を人間の所有物だと信じている。何と大きな間違いであろう!こんな大きな間違いはどこにもない。それは恰かも赤ん坊がその母と父彼らの家と財産、その兄や姉達が彼の所有物であり、彼だけのために作られていると考えるのに等しい。

小説家はたくさんの登場人物を創る。これらの小説の登場人物がすべて1人だけで、又は全員でもよい、彼らを創作した作家をとらえ自分のものにし、彼らの意のままに使われる召使のように使うということは可能だろうか?

大海の中で生れ、そこで成長した1匹の魚が至る所泳ぎ廻った後、その海を自分の財産だと考えたとしたら!これ以上こっけいな話はないであろう!この魚が海を作ったのでは決

してなく、海こそそれを作り、生かしたその母の名前なのである。もしもこの魚が海を自分の所有物だと主張するならば、もしも彼が暴力や武器によって同様な権利を主張する強奪者達に対してピストルや爆弾の論理によってその所有権を守ろうとするなら、これにまさるこっけいはないであろう!そしてもしも彼が多数の超強力な水爆でも準備するならば、どうなることであろう?彼自身の生命、健康、エネルギー、思考、記憶さえ失うかも知れないのである。これらの喪失をどうしたらさけることが出来ようか?彼自身の体が早晚失われるであろうし、それに対してはどうしようもないことがとっくの昔から分っていることをなぜ考えないのだろうか?

この悲惨な大きな間違いは人間にとっても現にあてはまる。その例は”民主主義”或は”人権宣言”と呼ばれる巨大な宣伝である!

人間は大自然のすべての作品の中の一つの作品にすぎない。そして人間はその生活と所有の権利を勝手に主張しているのである。”人間はその自身の幸福を追求し、それを享受する自由をもつべきである”と人間は宣言している。もしも赤ん坊がその両親、召使い、財産家屋、その兄弟達が彼のお陰であるなどと言ったなら恐らくは肩をすくめるであろう。この誤りは人権宣言に発表されたデモクラシーの誤りと同じである。すべてこのような誤りの上に組立てられ、でっち上げられたものが西洋科学と現代文明を形成している。

人間にとって最も重要な欠くべからざるものは、光、水、空気、山と海、太陽と星宇宙と何十億の星雲や星座・草木、等であり、すべては常に永遠に、記憶されない昔から存在していたものである。それは存在するものすべてであり、無限の過去から存在し、永遠に存在しつづけるであろう。全体をひっくるめて、我々の作者であり、我々のドラマ、我々の舞台の場面であり、我々の役者、我々の舞台監督、我々の舞台装置家、我々の助手、我々のオーケストラである。我々の身体はその小さな役を演ずる人形の一つにすぎず、それらのお陰で一瞬間舞台に現われるにすぎない。この操り人形がその作者、その使用人、劇場の所有主が自分の所有物だと考えたなら、こんなおかしなこっけいな侮辱はないであろう!空気と光は、宇宙、何十億の星雲、山や海、CとO、金と銀、ダイヤモンドと並んで、はじめから終りなき終りまで、無限にまで存在し・存在するであろう。

この存在を発見する人、この存在がその小さな”自分”のはじめであり、源であり、魂であり、存在理由であることを認める人こそ、既にこの存在と一つになっているのである。彼は既にこの所有主—存在を彼の魂としてさえ考える人である。この永遠なる存在、すべてのものの所有主は、それ自体無限、絶対の永遠なるものである。いろんなものの所有を捨てる人、決して専有しない人は、存在をもつ人、決して所有しない人で、それこそすべてをもつ人である。そして何ものも所有しない人は、すべてのものを創造した人だけである。

所有する人、又はいつもより多く所有したいと思う者は肩に大きな重荷を背負って長い道に行く方がよろしい。彼にはいつも何ものかが不足しているだろうし、決して自由にならないだろう!

本文の複写、複製、転載、その他いかなる方法による使用の際には日本 CI 協会にご相談ください